中学校教科書では

日本経済の成長について

第一次世界大戦中に，世界経済で力をのばしたのが，戦場とならなかった日本とアメリカでした。日本では，戦争に必要とされた船舶や鉄鋼などを生産し，重工業が急成長しました。

3 鈴木商店

1874(明治7)年，鈴木岩次郎(岩治郎)が輸入砂糖取り引きを中心とした鈴木商店を神戸市中央区栄町通りに創業し，金子直吉を中心に樟脳輸出にも取り扱いを拡大したが，1894(明治27)年，岩次郎は病没した。その後，妻のよねが店主となり，店を継続することを決めた。よねから絶対的な信頼を受けた大番頭の金子は，支配人として自らの経営哲学のもと，つねに先頭に立ち大躍進をとげた。1914(大正3)年，第一次世界大戦が始まり，戦争はすぐに終結し，戦争被害による影響で物価が下がるというのが，当初の世論の見方であった。しかし，金子は海外から報告される情報を総合的に判断し，開戦後の11月に「すべての商品船舶のいっせい買い出動」という「大方策」を決定した(このとき川崎造船所の松方幸次郎社長も材料鉄鋼確保の買い出動を行ったが，その多くは鈴木商店に依頼された)。金子の予想したとおり，開始後3～4か月後には銑鉄・鋼材・船舶・砂糖・小麦などがいっせいに暴騰，一挙に1億数千万円を得た。

▲① 鈴木よね
(太陽鉱工株式会社蔵)

▲② 金子直吉
(太陽鉱工株式会社蔵)

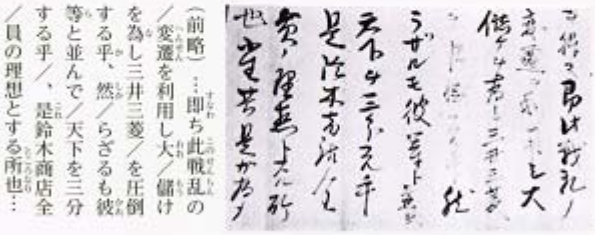
▲③ 神戸市中央区東川崎町　米騒動当時の鈴木本店(大正3年～7年)『英和日本商工人名録』(1918年発行)より(神戸大学附属図書館蔵)

さらに鉄・小麦・船などについて日本を介さない三国間(仲介)貿易により，売り上げが急拡大する。金子はさらなる超多角化志向の経営戦略に邁進し，樟脳・薄荷・砂糖・魚油・メリケン粉・鉄鋼，果ては造船まで輸出入製造販売を手がけ，設立した会社は神戸製鋼所・日本製粉・播磨造船所・帝国人造絹糸等々，鈴木商店の関連会社は60社余りとなった。

1918(大正7)年，米価高騰が続き全国で米騒動が広がるなか，神戸でも暴動が起き，鈴木商店も新聞の米の買い占め報道で大衆に疑惑をもたれ，群衆に本店等が焼打ちにあう惨事に見舞われた(鈴木は買い占めを行っていなかったことが後年検証されている)。しかし，大戦終結に際し，まだ混沌としていた欧州諸国に対しての輸出，買いつけで巨利を得て即座に復活した。1919(大正8)年～20(大正9)年の全盛時代の売り上げは，16億円(当時の日本のGNPの約1割)に達した。この額は三井物産や三菱商事をはるかに上まわっていた。しかし，金子ひとりによる独断経営は，1927(昭和2)年に起こる金融恐慌により一気に破綻をきたし，樟脳取り引き以来，金融を依存していた台湾銀行からも新規貸出停止を通告され，鈴木商店は同年4月倒産した。

「天下三分の計」

1917(大正6)年，金子直吉はロンドン支店長高畑誠一(のちの日本商業(日商)社長)にあてた手紙の中で「この戦乱を利用して大もうけをなし，三井，三菱を圧倒するか，あるいはその二つと並んで天下を三分する」と記し，鈴木商店の大目標を示した。



(前略)…即ち此戦乱の／変遷を利用し大／儲けを為し三井三菱／を圧倒する乎、然／らざるも彼等と並んで／天下を三分する乎／、是鈴木商店全／員の理想とする所也…

考えてみよう

(1) 鈴木商店が成功した理由を考えてみよう。

(2) 鈴木商店が倒産した背景には，第一次世界大戦後の日本における戦後不況の深刻化があったが，その原因は何か，ヨーロッパの復興とあわせて考えてみよう。